



第25図 茨城県内から出土した双耳壺

表4 茨城県内で出土した双耳壺

	出土遺跡	点数	遺構	材質	時期	備考
1	坂戸遺跡	1	遺構外	須恵器	9世紀	
2	浜ノ台窯跡	4	第1号土坑	須恵器	9世紀	
3			〃	〃	〃	
4			第1号住居跡	〃	〃	高台部及び双耳部欠損、竈内出土、墨書き
5			〃	〃	〃	
6	一本木遺跡	2	遺構外	須恵器	9世紀	転用硯の可能性有り、浜ノ台窯産か
7	下栗野方台遺跡	1	第8号住居跡	須恵器	9世紀か	
8	峯崎遺跡	2	第68号住居跡	須恵器	9世紀	浜ノ台窯産か
9			〃	〃	〃	
10	下り松遺跡	1	第69号住居跡	須恵器	9世紀中葉	
11	下木有戸C遺跡	1	第17号住居跡	須恵器	9世紀	
12	大生郷遺跡	1	第24号住居跡	須恵器	9世紀	
13	熊の山遺跡	1	遺構外	須恵器	不明	

2 双耳壺について

双耳壺は県内でも出土例が少なく、確認できたのは13点である（表4、第25図）。出土している遺跡は、三和町浜ノ台窯跡¹⁾、八千代町一本木遺跡²⁾、千代川村下栗野万台遺跡³⁾、結城市峯崎遺跡⁴⁾、同市下り松遺跡⁵⁾、関城町下木有戸C遺跡⁶⁾、水海道市大生郷遺跡⁷⁾、つくば市熊の山遺跡⁸⁾である。特に、浜ノ台窯跡からは4点が出土しており、この地で生産されたものと思われる。2点が出土している第1号土坑は、二号窯の焼成後の不良品の捨て場だったと考えられている。

双耳壺が出土した遺跡の分布については、出土総数13点のうち12点が県西部の鬼怒川流域から出土したものである。県東部から出土したのは坂戸遺跡が初めてであり、当遺跡は巴川流域の東側の台地上に位置している。

生産地については、県西部から出土しているものの多くは、三和町浜ノ台窯で生産されたものと考えられているが、当遺跡出土のものは不明である。胎土分析等から、生産地が限定されることを期待したい。

器形については、体部に把手がつくものと考えられるが、底部が欠損しているもの以外はすべて高台付壺である。そしてその把手部に特徴があり、当遺跡から出土した双耳壺は、把手の断面が扁平な四角形で、体部の上半部についている。これと似た器形は、結城市的峯崎遺跡で1点みられるが、これ以外は断面形が円形または橢円形で先端が外反する牛角状のものが多いようである。

用途については、祭祀に関係するものとする説などが述べられているが、出土点数が少ないとおり不明と言わざるをえない。

県外では東北地方（山形県、宮城県、福島県）や南関東地方（東京都）などで若干出土しているようであり、今後は周辺地域も含めた集成の必要があると思われる。

註

- 1) 三和町史編さん委員会 「三和町史 資料編 原始・古代・中世」 三和町 1992年10月
- 2) 常総考古学研究所 「一本木遺跡発掘調査報告書」 『八千代町埋蔵文化財調査報告書』 第6集 八千代町教育委員会 一本木遺跡発掘調査会 1997年3月
- 3) 下栗野万台遺跡発掘調査会 千代川村教育委員会 「下栗野万台遺跡 工場用地建設に伴う緊急発掘調査報告書」 『茨城県結城郡千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書』 1993年3月
- 4) 山武考古学研究所 「峯崎遺跡」 『結城市文化財調査報告書』 第7集 結城市 1996年3月
- 5) 茨城県教育財団 「一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 下り松遺跡・油内遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第145集 1999年3月
- 6) つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会 「下木有戸遺跡発掘調査報告書 下木有戸B・C遺跡」 茨城県真壁郡関城町 1991年10月
- 7) 茨城県教育財団 「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書 大生郷遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 XII 1981年9月
- 8) 2001年3月報告書刊行予定

参考文献

- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I)」 『平成3年度 研究ノート』 創刊号 1992年7月
- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(II)」 『平成4年度 研究ノート』 2号 1993年7月